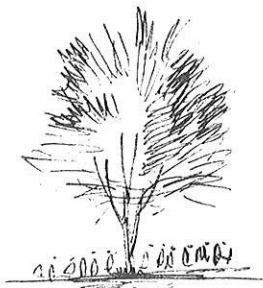


光の子



No.92 2001. 1. 1

- 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさいと、
主は言われる。(ルカによる福音書 6:31)

謹
賀 新 年

おかげさまで 三千年紀の第一年を前傾姿勢で迎えました
旧に倍するご支援を乞い 豊かな祝福をお祈りいたします

社会福祉法人 光の子どもの家



「ゆきがつせん」

え・中島英子

「去年今年」

そよりもせぬ杉の穂や去年今年

初明かり伊豆は静かな生み展げ

山の香のどつと入りこむ初湯かな

ねんねこの母子に遠い海の音

一水を輝かせたる枯野かな

山風の鳴きにきてゐる白障子

山茶花の日の濃き方へ方へ散る

黛 執 (『春野』主宰)

それにしても、旧盆の東北地方の列車は、世情を彷彿とさせて、なかなか趣がある。

旧知の相手との久しぶりの出会いの挨拶から会話が始まる。昨日の東

学者もどきのつづき ④

東北の嫁たち

山形大学医学部

学部長

仙道

富土郎

に、在籍していた仙台の高校から郷里の秋田に帰省するときに乗った時以来の乗車である。もうすっかり忘れてしまったし、また当時とは全く変わってしまったに違いない車窓の景色を楽しめばいいのに、「ひかりの子」の次の原稿の締め切りが気になりだし、やおら電子手帳を取り出し、そのワープロ機能を使って原稿を書き出す。貧乏根性がいつも追いかけて来る。

列車の中で読もうと思っていた「論座」を秋田の実家に忘れてきてしまった。

秋田県の横手から岩手県の北上まで一両編成の一時間あまりの北上線というローカル線の旅である。北上が黒沢尻と呼ばれていた何十年も昔

北新幹線と今日の北上線で周囲から聞こえてきた会話がほぼ同じ内容であったのには苦笑させられてしまった。

ご亭主が亡くなってその伴侶が残った本家には、ご亭主の兄弟、姉妹たちは寄りつかなくなり、お盆に帰省しても、本家には寄らずに、他の兄弟、姉妹の所に顔を出して帰ってしまふのだと言う。全て悪いのは長男の嫁で、自分の親戚は頻繁に引き込んでいるのに云々かんかん。

以上は新幹線の中での話だが、今日北上線の中で小耳に挟んだ話も、状況は少し違うが、酷似している。（ここまでで電子手帳に書かれた原稿は終わっている。一時間にしては短い。おそらく途中で寝たか。）

あれからもう四カ月もたつてしまった。「ひかりの子」の編集子からはどうしたのか一向に原稿の催促が来ず、ここまでで原稿は止まっていた。ところが、こんなことをばらすと編集子に消されてしまいそうな危険性を感じるのだが、最近になって年内に三本の原稿をよこせと言う連絡有り。背に腹は代えられず、時期はずれの原稿を引っぱり出した次第。それにしても本家の兄嫁さんこそいい面の皮だという想いが、数カ月を経てまた私の中に残っている。

私たちの家族にしてからが、今はもう子どもたちが離れて住んでいるのでそんなこともなくなってしまうが、昔はお盆などに親子七人で兄貴の家に泊まりに行っていたが、義姉は布団を敷くだけでも大変なことだったと思う。

しかも、兄と小生はぐだぐだと深夜まで飲みふけるのである。自分にも他人にも厳しい母の文句を聞きながら、よくも四人の子どもを育てたものだと思う。でも白状すれば、私だつて「義姉さんはー」と言つたことが全く無いと言えは嘘になる。なんとも長男の嫁は大変であることよと心から思うのである。

大学で働いている女医を除いた既婚女性はおおよそ舅、姑と同居している長男の嫁ばかりのようである。彼女らの年齢の人たちが生まれたころはそろそろ少子化の先駆けか、次男に嫁ぐのは難しくなり始めた頃なのかもしれない。彼女らは第一子を出産して休暇が終わると、皆子どもをおばあちゃんにあずけてまた働き出す。おばあちゃんだけではないよ、うで、おじいちゃんも孫育てに参加している場合が多いらしい。

テニス仲間で定年になった一人が、日曜でないでテニスができないと言う（私たちのクラブは土曜、日曜が

ほぼ例会になっている）。良く聞いてみると、月曜から土曜までは、孫の面倒をみなければならぬということらしい。

嫁の収入が大きな割合を占めていれば、こういうことになるだろう。そしてせつせとかせいだお金を貯めて立派な家を建てるのである。

山形県の個人住宅の広さは全国で一番と聞くが、長男の嫁の収入がかなりの足しになっているのだろう。しかしこの点に関しては、東北地方を一括りには出来ないかもしれない。

秋田の嫁もよく働いていると思うのだが、秋田県は全国でも持ち家率が極めて少ない。そして、アルコール消費量勿論全国一位である。そうすると、秋田の男性には悪いが、嫁に働かせて、男たちは、その金で酒を飲んでいるということか。

いずれにしても、東北の嫁たちは三代同居という家族構成の中で、奮闘していることは間違いないが、彼女らを待ち受けているのは、彼女らに決して心を開かない舅、姑の介護であることを思うと、すこしく同情の感を禁じ得ない。



人にしてもらいたいと・・・

・・・新たな千年紀の初めの年に・・・

施設長 菅原 哲男



地上に人類が現れて数百万年と言われ、歴史を持ったのが二〇〇〇年。三度目の千年紀が新に始まったことを慶賀したい。

その初めの世紀である二一世紀がどんな世紀になるのだろうか。多くの人がそれぞれにこの世紀への期待や不安を抱え、それをそれぞれに表現している。そのような歴史的に大きな節目に立ち会うことができた幸運を実感している。

不透明な時代と言われているが、二〇世紀末には混沌の度が極まりつあったことを子どもたちの一見不条理な言動が表現していた。そんな中で、「だからどうするか」という前を向いたものの見方をしていかなければ、極まっていく混沌に巻き込まれてしまうだろう。

光の子どもの家が始まって十六回目の新年を迎えた。

少子社会が進行していくなかで、一向に減少しない児童養護施設を必要とする子どもたちの数と、これまでの経験や知識、技術では対応不可能になっている子どもたちの負わされた問題の質の深刻化は、養育現場を一層困難に陥れている。

そのような社会や人との関係をつくりだしてきた、大人にその責めの全部があることは自明である。

だから、子どもたちの病理的な部分だけを見ているだけでは大きな見当違いの対応になるのである。

社会福祉の分野では、一九八〇年代を分岐点にして、それまでリードしてきた民間の法人や個人に代わって、行政がその基準や施策を先行させ始めている。

社会福祉事業法の改正では、相当な問題を内包しながらも、決定的な発想の転換を迫り、利用者を前面に立てたものに変更したといわれている。これは言いかえれば公の責任から自己責任への転換である。

自己の生活や発達などの、現に後回しにできない問題に対応できず困窮している者に、人間として無条件で今対応することが社会福祉の具体的な関わりや対応であったのである。

自己責任で対応できない者に、自己責任で対応し、利用者とサービス提供者が対等になれるという論理的、現場的な矛盾は決定的に大きい。国や地方の財政が縮少することは事実なので、どうしても減らさないことにしていると思われる外交、安全保障などがあることから、勢い、福祉や衛生などの社会保障、教育などの行政サービス部門が削られるターゲットになる道理でもある。

児童の世紀にという期待を表明し

て始まった前世紀は、絶えたことのない戦乱の連続だった乱暴の世紀であったと言える。

科学技術の進歩と経済発展の仕組みや仕方、社会構造や現象なども乱暴がキーワードであり続けた。

しかし、新しい千年紀の始まりである二一世紀には、そのことへの厳しい反省と総括をして、新たなあるべき展望を切り拓いていかなければならないと考える。

そのことを考えるひとつの基準として掲出した標題を提案したい。

光の子どもの家においては、おかげさまで「人にしてもらいたい」ということを、人にしなさい」と言われた言葉が現実になっている十五年間の歩みがあることを、それだけを誇る事ができるのである。

この大不況の時代にも、私たちの呼びかけのあるなしに関わらず、人にしてもらいたいことを、親や家族に見捨てられた最も弱い存在の子どもたちに、豊かにして下さる方々の多くの思いや心が集められ、人並みな暮らしを何とか実現することを可能にしているのである。

新たな時代の始まりとしての第一年。この年こそを、強者中心の乱暴から弱者受容の・・・子どもの世紀への第一歩にと、祈り願うのである。

2つの文化に生きる

26

日本キリスト教団東大宮教会

バーガー 京子

次のミレニアムの歴史の一コマに参加できることを感謝して毎日を送っていきたくて新たに思う。

私は六年程前から教会学校で奉仕をさせていただいている。毎月、教案に基づいて教会学校がすすめられているのだが、今年度は一年間通して新約聖書のマタイによる福音書を学んできた。今まで何度も読んだことのある福音書だが一年間かけてじっくり読んでみると学ぶことが実に多い。

二十一世紀の始まり、いいえ、第三のミレニアム(3rd millennium)の始まりである。キリストの誕生から二千年たった今、世界中には十九億四千万人余りのキリスト者たちがいると言われている。次のミレニアムも神の御計画の中ですべてが守られることを祈らずにはいられない。

千年という年月は神様にとってはほんの一瞬に過ぎないかもしれない。けれども私たち人間にとっては途方もなく長い年月に感じられる。なぜならば私たち人間はどんなにがんばってもその中の数十年(長い人でも百年位)しかこの世ではその歴史を刻むことができないからである。

マタイは新約聖書の一番始めに出て来る福音書である。一章の始めにはイエスの系図が書かれている。一節から十七節に渡ってアブラハムから始まってイエスの誕生に至るまで、先祖四十二代、ただひたすら名前が並べられている。今までは何気なく読んでいた場所なのだが、改めてじっくり読んでみて実に意味の深い、新約聖書の始めに相応しい場所であることが、つい最近になってわかった。アブラハムといえばイエスの誕生の二千年程前に生きていた人である。イエスの先祖がひとり残らずアブラハムに至るまで二千年も遡って書き記されていることに先ずは感激である。

「福音」とは英語で「good news」(良い知らせ)ということなのだがマタイさんはその良い知らせの書き物をイエスの先祖の系図から始めた。これには深い意味があったのだ。

実はイエスの先祖はすばらしい人や正しい人ばかりではない。神に背いたり、神から嫌われるようなことをした人々が多々含まれている。歴史的に有名なダビデ王は他人の妻をわりやり奪ってしまった罪人だった。そしてこの系図で決定的なものはマリア以外の女性の名前が四人も書かれていることである。タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻(バトシエバ)。

当時のユダヤ人の系図では女性は普通は無視されていたため、これはかなり画期的なことと言える。そして次に驚くことは彼女たちは皆、当時ユダヤ人たちが嫌っていた外国人だったことだ。そして、タマルは男を誘惑した女だった。ラハブは遊女(売春婦)だった。バトシエバは夫以外の男ダビデとの間に子をもうけた。

神はどうしてこのような不完全な人間たちをわざわざイエスの先祖としたのだろうか。

その答えは後にイエスがはっきりとおっしゃっている。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。…わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(マタイ九章12、13)

外国人や罪人が加えられた不完全な人間たちの中から神の子どもイエスがお生まれになったことには深い意味があったのだ。

それは神様がすべての人種、すべての罪人を愛してくださっていることを私達に伝えるために御計画されたことだった。

信仰の父アブラハムから二千年の後に神の子がこの世に生まれ、その二千年後に私たちが今、その御子によって生かされている。この奇跡ともいえる神の御計画に感謝し、今年から始まる新たな千年の歴史の一部を刻める幸いを噛み締めながら、グッドニュースを静かに伝え続けていける一人になりたいと思っている。

新しい年を迎えて、Happy New Year!ではなく、やっぱり今年はHappy New Millennium! (新たな千年おめでとう!)である。



エッセイ

タカラヅカ

人間にとって最も大切なものは何か、などと、時々考えさせられることがある。

哲学的な思考とでもいうようなものは初めから無理なので、せいぜい「休むに似た」程度の考えをめぐらせるわけだから、その時によって解答が変わってきて、矛盾の起こる事もやむを得ない事だが。

家内が病気で入院していた頃のことである。次第に病状が悪化して、食事が流動食になり、それもだめになつてしまい、しばらくの間、点滴だけで栄養を摂っていた時があった。そうになると、病室のベッドに寝たきりになってしまつて、起き上がる事もできない。寝返りをうつことさえできなくなつて、看護婦さんに体を動かしてもらおう、という状態であつた。

自分の力では歩くことも、立つこともできず、食べることさえできなかったのである。

ところが、翌日学校へ行ってみると、生徒たちは実に元気である。自分の力で食べ、自分の力で立ち、歩き、そして走り回つて、明るく笑

ころげているのである。しかも、こんなことは全くあたりまえのことのように。

しかし、同じ時に、別な場所では、身動きすることでもできず、食べることもできず、病室の白いベッドの上で、神から与えられた生命の灯を、辛うじて保ちながら、じつと無言で耐えている人もいるのである。

元気な生徒たちは、自分で立ち自分で食べ走り回ることのできる当然であたりまえの事が、考えてみればどんなにすごいことか、恐らく気づいていない。

私は、この時、人間について何が大事なことなのか考えさせられてしまった。

その後彼女は、神仏の加護と関係者の努力によって、何と在宅療養出来るまでになった。そして、単調な生活の中から機会を見つけて、音楽のコンサートなどに出かけることができるようになった。

ある大ホールでのことである。入場はエレベーターで上がってホールに入る。

あの入院以来、足がすっかり弱つ

てしまった家内は、何十段という階段を上がるのは、大変な苦痛なのである。ただし、下りは比較的楽なので、階段を下りることになる。それは多少リハビリという意味も考えているのかもしれない。

コンサートが終わつて、どつと人があふれ出るとき、私は家内に呼びかける。

「タカラヅカでいこう。」

私は、家内と腕を組んで、大ホールの前の広い階段の中央を、ゆっくりゆっくりと降りる。二人の足は、そろりそろりとではあるが、ぴつたりと合っている。私は小声で口ずさむ。

「スマイルの花咲く頃、初めて君を知りぬ。」

「やめてー笑っちゃうと転ぶからー」家内は、一歩一歩足元を確かめながら私がふざけて歌うのを、これも笑いをこらえながら目だけは真剣に言う。

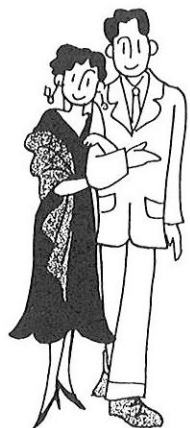
本物の宝塚劇場では、文字通りの美女が美しく腕を組んで、美声を張り上げながらうっとりするように階段を降りることであろう。

彫刻家 中島 睦雄

ところが我々のタカラヅカは、醜男醜女。しかも腰の曲がりかけた老夫婦がヨタヨタと階段を降りてくるのである。第三者には、この姿がどのように映るかわからない。

しかし私たちにとっては、単なるたわけでもなければ美しい夫婦愛でもない。腕を組まなければ降りられないのである。

そして、やつとこさでも当たり前前にできる事の貴さをかみしめ、ふみしめているのである。



21世紀の

ここで少しだけ考えてみよう。集会中に赤ちゃんが泣くのはどのような状況か。

もし体の具合が悪いのでなかったら、次の二つである。空腹か、その場の空気が緊張度が高く自分に敵対的で息苦しいか。したがって泣き止ませたいと思ったら、空腹を満たしてやればいい。息苦しい室内を出て子どもを気持ちいい空気の中に解放してやればいい。大人たちだって、そうではないのか？衣食足りて礼節を知る。腹が空けば怒りっぽくなる。自分の欲望（自分の考え、思い）を無視されたとき、反発し怒り憤慨するのではないか。

子どもたちは自ら除去できない苦痛を表出する。苦痛は受け止められれば、消滅する。苦痛が消滅すれば泣く理由はなくなる。受け止める人のいるところでは、子どもたちは自分の欲望を素直に安心して安全に表すことができる。ここには暴力による強制も恐怖もないからだ。

この受けとめにはもう一つ多大な果実がもたらされる。それは受けとめてくれた人を子どもは信頼し、感謝するということだ。受けとめられた経験・記憶が積み重ねられることによって子どもに生じるこの信頼と感謝はやがて、待つということ、言い換えれば我慢するということとして親に、大人に返ってくる。なぜなら子どもは、この人は遠からず必ず自分の苦痛を取り去ってくれると思うことができるからだ。

ここで受けとめる人が固定的であるとき、赤ちゃんにとって、その人が母である。母とはそれゆえ子どもの表出を最初に受けとめる榮譽を授かった人のことである。

だがエホバの証人の長老や母親たちが行ったこと

子どもたちへ

ひとは一人で生きられる

ひとは一人で生きられる、このことはほんとうだ。けれども誰も正面切って口にしない。だから私が言おう、ひとは一人で生きられると。

こう記すと、では赤ちゃんはどうか、幼児はどうか、小学生はどうか、中学生は、高校生はと聞いてくる人がいる。悲しくならないか、自分の無思考が。自分のやるべきことを忘れて、目の前の現象しか見ていない。

そんな大人たちは、口を揃えて言う。ひとは一人で生きられない、だから人のことを考えなさい。自分の欲望を優先させることを考えてはいけなさい。

子どもたちは、こうした言葉の脅迫性と嘘を知っている。赤ちゃんはもともとよくその脅迫性と嘘を見抜いている。子どもたちは真実を知っているのだ。自分の欲望を優先することを肯定されること、承認されることによってしか、人のことなんか考えることはできないというのが真実だということ。

一つの例を紹介してみたい。エホバの証人の子どもは集会中に泣いたり騒いだりするとムチで叩かれた。しつけであつた。愛のこらしめとも呼ばれた。聖書の中の言葉を真に受けて長老たちは子どもたちを叩くことを親たちにすすめた。「子どもをこらしめることを控えてはならない。むちで打つても、彼は死ぬことはない。あなたがむちで彼を打つなら、彼のいのちをよみから救うことができる」（箴言二十三章）。早い子は生後六ヶ月、十ヶ月で叩かれは

評論家 芹沢 俊介

じめた。

叩かれた子どもはいつそう激しく泣いた。しかし繰り返し容赦なく叩いているうちに、子どもは泣かなくなった。叩くことが功を奏したのだ。こうして自分の欲望を優先させることを抑えることのできる素直で柔順な子どもが出現した。

さて生後十ヶ月から叩かれていた弟のその後について姉は次のように語っている。

弟は本心を顔に出すこともなく、悔しくても、悲しくても、楽しくても『うん』と反応するだけだった。友だちと野球をしているときだけが、唯一表情を見せるときだった。しかし友だちの親を含めて大人を前にすると、とたんに硬くなり殻に閉じこもった。

弟は母に叩かれると『ありがとうございます』という子だった。ところが、母がエホバの証人を離れると、母親と話すのを面倒がるようになり、中二になると『おばさん』と呼んだ。父親が赴任先から自宅に戻っているときでも平気で『おばさん』だ。父親がいなかったときは父親のことも『おばさん』と呼んだ（エホバの証人については米本和宏「カルトの子」によった）。

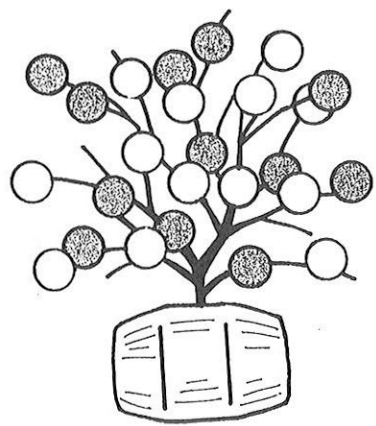
苦痛を与えられたことに感謝する子どもにあなたは満足をおぼえるだろうか。それともこのマゾヒズムをもたらししつけとしつけのイデオロギーに恐怖するであろうか。

は、まったく逆なことであつた。子どもの苦痛の表出を受けとめるのではなく暴力により苦痛の表出の制止・禁止を図つたのである。その結果、母親はおばさんに、父親はおじさんになった。

苦痛の表出を受けとめられず、反対に苦痛の表出を力で抑圧・制止・禁止されたとき、その経験・記憶はさらに大きな、もはや大人には受けとめ不可能な表出となつて出現するのである。

私は信頼と感謝に向かうプロセスをイノセンスの表出（子ども）↓受けとめ（親・大人）↓イノセンスの解体（子ども）という図式で表すことにしている。そしてこのプロセスを指して一人で生きることができる過程と呼んでいる。

二十一世紀は一人で生きていこうと意欲するものの時代になることを期待しよう。この期待が実現するための必要十分条件は唯一、大人が「受けとめ」という自らの役割に徹し、そこから逃げ出さないこと、これである。



プ・リ・ズ・ム

河のほとり

倉澤家

明けましておめでとうございます。本年も子どもたちともどもよろしくお願い致します。

気の毒なことに入所以来担当を一度も替わらなかった高一の沙慧と、四人目ではありますが、前任者たちの担当期間が短かったため四歳から担当してきた高二の重紀とは今年で十四回目のお正月を迎えることになります。これまで、私が二人にしていたことで自慢できるようなことは殆どありません。唯一誇れるとすれば、担当者であり続けたことでしょうか。それが果たして良かったことなのかどうかは疑問ですが、限りなく「家族」に近づけたことを実感できる今日この頃です。

何かの理由で二人が不在であるとき、頭数は減り食事作りなどは楽になるのですが、何か物足りない、日常との違いを感じます。同じ空間でゴロゴロしていることがとても快い・そんな存在にまでなることができました。

何もできなくてもいい、居続けるだけで・・と言われてきた言葉の意味がやっと分かった気がします。

この二人も一年後、二年後には旅立っていくことになります。その時のことを思うと寂しくなりますが、楽しみでもあります。そして、また別の子どもたちと「家族」になるための貴重な時間を費やしていくことになるのでしょうか。

二十年後、三十年後に、年老いた私を真ん中にして「大家族」の集合写真を撮ることができたらいいなあーなどと考える年齢に私もなりました。

倉沢 智子



子どもたちの季節

仙道家

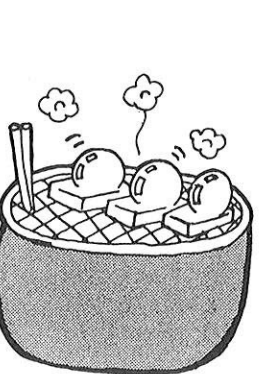
新年のお慶びを申し上げます。

昨年は、子どもたちのことをお覚えていただき、お祈り下さいましてありがとうございました。

皆様のお支えに感謝しつつ、今年も子どもたちと歩んでいきますので、よろしく申し上げます。

十一月初め、生活にもようやく慣れてきた五歳の由子が、幼稚園にくくことになりました。八月初めの入所後なかなか生活になれることができず、二学期開始と同時に登園、とはいきませんでした。由子が、「幼稚園にいきたい」というのをまとうと考えました。

同年齢の裕たちが、車で幼稚園に送ってもらった際、時々一緒に連れて行って貰い、幼稚園を覗いてきたりしました。しかし、「幼稚園、いく？」と訊いても、「由子いらない！」との答えに、無理にいかせることは、ためらってしまいます。そうこうして



る間に十一月になりました。

そんなある日、施設長から、「週が明けたら幼稚園に行かせるように。」と司令がありました。

「え！何で、こんな突然！幼稚園にも迷惑じゃないかしら。」と不満が膨らみます。でも、よくよく考え、この期を逃したら、また幼稚園の道は遠くなってしまう、と心を改め、由子にも、「行きたい？」と訊くのではなく、「行くんだよ。」と断言しました。

いよいよ週が明け、月曜日。制服に着替えるように由子にいうと、何と！嬉しそうに着替えるのです。多少の不安は表現しましたが、初登園は、予想していた激しい抵抗はありませんでした。

園長先生が不在の中、こちらの要望を受け入れて下さった幼稚園の理事長先生、担任の先生方には心から感謝の気持ちでいっぱいです。

池田 祐子

原田家日記

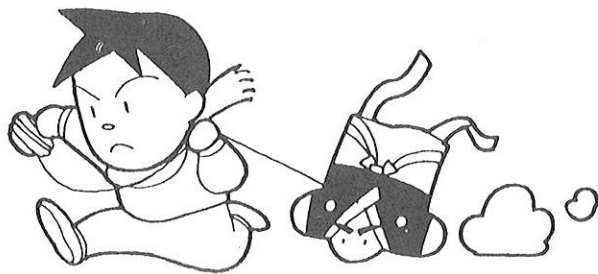
光の子どもの家の定員はずいぶん前から超えていたので、卒業生が出ていくまで入所はないと決めていた。そんな十一月初旬、入所依頼が来たという。中学二年生の子どもである。

もし入所を受けるならば、自分が担当にならずとも、同じ家の服部が担当になることは明らかであった。無理・だよねえ・そう思った。思春期の子のブレは大変であることをつい先頃経験したばかりで、骨身に沁みている。万引き、家出・数々の悪夢が頭を駆けめぐった。とても積極的にはなれなかった。それなのに・入所だ・思った通り服部が担当した・ああ。

そしてヒロミが入所して一ヶ月が過ぎた。

小さい子を寝かせて、寝そべってTVを見ていたときが一番幸せだね、と、たくさんおしゃべりできるようになったヒロミに話しかけた。

ヒロミは、「学校から家に帰ってくる時が一番幸せ」と言った。何だかとても嬉しかった。ここが彼女にとって「家」であること、その「家」が帰りたい場所であるという。



わずかに十四歳で自ら悔いて『人生をやり直したい』そう思っただけに来たヒロミだった。

期末テストの英語を見せてくれた。八十七点だった。ヒロミの入所に反対していた自分が恥ずかしくなった。

まだ始まったばかり・・。ヒロミの成長を温かく見守っていこうと、年の初めに誓った。 神田 幸枝

光の中で

佐藤家

大学受験を間近に控えた高校三年生の萌季はラストスパートをかけている。

きつと夜を長く感じ、ここでの残り少ない日々を一日一日、噛み締めるように過ごしていることだろう。

何時間でも勉強に費やしたい彼女だが「ここぞ！」というときには佐藤家の長女として家事をこなし、小さい子どもの面倒を見てくれている。

私は、この十二月から佐藤家のメンバーに迎えられ生活を共にしてきたのだが、わずか二週間で彼女の存在を実感している。本当に頼もしい十八歳である。

先日、ある出来事があり彼女と少々真剣な話をする機会があった。「他者のことを自分のこととしてどれだけ考えることができるのか？」「自分のとった行動はそれで最善か？」「信頼されるには膨大な努力が必要だが一度の過ちで簡単に崩れ落ちてしまう。」『佐藤家の長女でもあり、光の子どもの家の長女でもあるんだ。』といった内容の話をしたのだが、彼女は終始うつむき加減で表情も曇っていた。

受験勉強・家の手伝いで精一杯の



彼女にはさすがに要求をしすぎた感もあるが、彼女なりに考え、整理がついたようで話が終わるころには一言「うん。」と頷いた。大人との会話が成立し、なおかつ理解することのできる頭の切れる萌季である。

中川 昭雄

隣る人 2

菅原 哲男

昌子も萌季も酷い虐待を受けてここにやってきた子どもであった。そんな子どもたちが、隣に人がいることを発見し、人との別れを悲しみ、痛む心が育っていたのである。と、前号に書いた。

二〇世紀と二一世紀との間にドラマティックな落差などがあるはずもなく、二〇世紀から圧倒的な影響を受けながら二一世紀が始まるものなのだろうと思う。だからという分けてはないが、引き続き隣る人について考えたいと思う。二一世紀もまた、人は隣り合う人と関わって生き、生み、育つものなのだろうか。

昌子については、これまでかなりの回数「見捨てられ」た経験を持っている。

昌子が幼い頃、注意や叱責などに、右手で頭部を庇う癖があったことから身体的な相当の暴行を受けてきたものと推測されたのである。

昌子が小学二年生の夏、それまで行方不明だった実母が児童相談所の職員に伴われて面会に現れた。

数年ぶりと言うよりは、初めての親子の対面といえるものだった。

昌子は母を紹介されると固い表情で、担当保母の後に隠れながら母の方を凝視していた。それでも、時間が経つと何やら決まり悪そうに少しずつ母に近づいていったのだった。

そのように始まった母との交流は、母が引越してきて近くに住む話が出るほどになったが、暫くして母は四〇代の男と同棲するようになった。昌子の帰省などは中断した。

相手の男性は意外なほど気さくでもの分りが良く、昌子のこととあつて入籍夫婦となったのであった。

昌子が四年生の夏から、家庭引き取りが本格的に計画された。

それまで、月に二度来訪して昌子の生活リズムを経験し、もう二度は週末帰省をくり返し、長期の休みには長めの帰省をし、義父がとりわけ気に入っていた昌子は、お父さんと一緒に銭湯に行った話など楽しそうにするようにもなっていた。計画は順調に進んで、五年生の夏休みいっぱい帰宅訓練を実施し、その結果で引き取ることにしていた。

私たちも何回か家庭訪問をし、養育の大変さや引き取り後のサポート

の仕方まで協議を重ねていた。

その夏、ひよつとするとこれで昌子はそのまま帰ってこないことになっていったが、夏休みが終わりに近づく頃昌子は荷物を持って帰ってきたのである。母と義父になった男は昌子を置いて行方不明になってしまったのだった。

そんなことがあつてしばらく後に担当者の退職がくり返されたことは前号で書いた。

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、「子どもの心はつくられる」という連続講義で、「人間の行動は自律性」と他律性とのバランスによって決定される」と説いた。(新説書社版)

ひとりの人間の心的活動は、その人の中にあるもう一人の他者である自己がなければならぬのである。もうひとりの自己と対話しながら人は人格を形成していくのである。

人の発現は母の胎内で始まる。胎内にいる間は社会的に一人格である。

出産分娩によって二人格になるのであるが、新生児期は母との共生期とか、胎生期といわれるほど一人格に限りなく近い存在である。

母は、子どもが不機嫌だと不安になり、母が元氣だと子どもも元氣なのである。この時期まで自己と区別の付かない他者と共生しているの

ある。したがって母の喜びがそのまま自己の喜びであり、不安もやはり言葉の正しい意味で共有している。

そのようにして人は、他者の喜びを、悲しみを共有する力を自然に身につけるのである。

ヘネシー澄子東京福祉大学教授は、「授乳する母の鼓動や血流の音を聞くことで展開する脳神経細胞」の存在を報告した。その時でなければ伸展しない脳神経細胞なのである。

「母性神話」と特にフェミニストはいう。

しかし、母、でなければ特定の養育者しか提供できない人格の発達への特別な関わりは無視できるほど小さくはないと思うのである。

昌子にとって喜びや不安を共有する隣る存在との出会いは、あっても貧しい時間と質量で、自分の行動や思考が、他者にとって何ものなのかを感じることができないほどのものだったのである。

昌子は高校卒業の直前に、一緒に育った仲間の友情や心を砕いて昌子の成長を待ち続けた職員たち・特に担当保育士などによって、不安や感動を共にする、隣る人の存在を示されて社会へと出発したのである。

陸続と続く幼く年若い昌子たちの群像が、隣る人を求めてここに来る。

現場から

続・光の子らしく

④

岩崎 まり子

新年明けましておめでとうございます。

昨年もたくさんお世話になり、ありがとうございます。本年もどうぞよろしく願います。

皆様、お元気ですか？とうとう二一世紀が幕を開けてしまいました。

「ドラえもん」で育った私としては、二一世紀はああいイメージで彩られており、とても人工的な世の中で、いわゆる土臭さが微塵も感じられない空間だったのですが、こうして実際に足を踏み入れてしまうと二〇世紀とあまり変化がないということ、少し拍子抜けしたり安心したり。皆様はいかがですか？

これからの一〇〇年でどう変わるかは解りませんが、何とか少しでも

二〇世紀は社会が複雑に変化した時代だったからか、心の病も増えてきたようです。

心の病について、世間的に偏見を持つ方も多いので少し申し上げると、世の中が複雑になり、ストレスが増えてくるとだんだん心が悲鳴をあげてきます。そして、その荷重に耐えられなくなるとき、表出の仕方は人それぞれですが心の病を発症するのです。決して特別な人ではなく、誰しもそうなる可能性があると思うといいと思います。そして、今は医

学の進歩により、社会生活への可能性も拡がっているのです。

職員の退職に伴って、今年度から担当をすることになった信一の親御さんもそんな風でした。

精神の病は遺伝しません。でも、病気に対して抵抗する力が弱い性質あるいは体質のようなものの遺伝は無視するほど少なくはありません。

年度当初、小学生の尚二君への暴力がひどく、目の前で蹴飛ばしたりこずいたりして、「やめなよ。」と止めに入ったときも平然とした顔で、しかも、相手がしくしくと泣いている状況の中で「何もやってねえよ。」と言えてしまう彼に、どう関わっていけばいいのか随分悩みました。

ここでは、児童精神科医の先生と連携していますが、その先生からのアドバイスは「ストレスを与えすぎないように」というものです。

信一への関わりのテーマは、発症



をできるだけ防ぐ、或いは、遅くするということですから、発症の原因となるストレスを過多にしないというのは、理にかなっているのです。彼の心の負担にならないように心しな

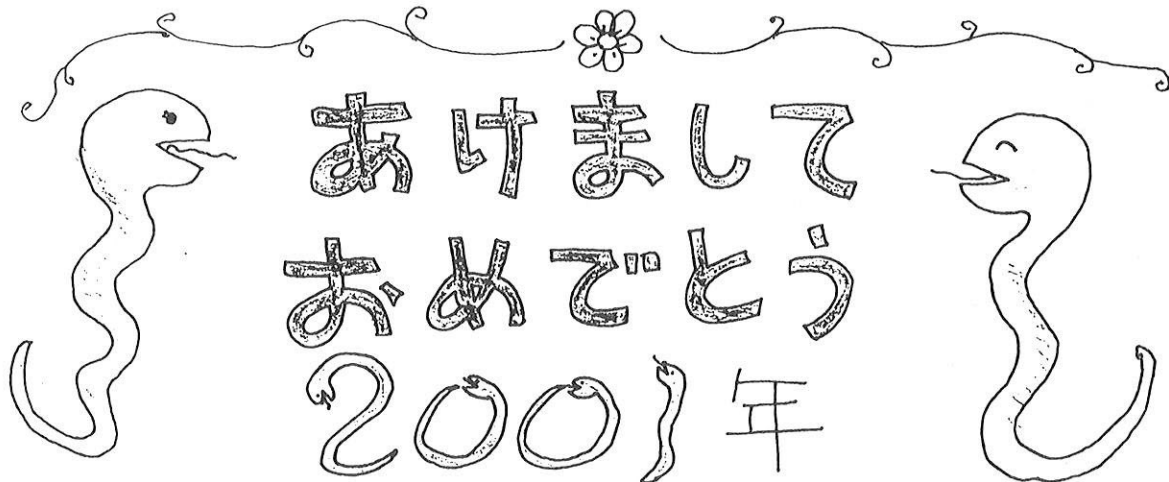
ら、いけないことはいけないということ伝えていく。それは、当初信一の暴力の頻度や対象の子どもの実質的な被害の大きさから考えると、とても難しいことのように思えました。

彼との交換日記に「どうしてそういうことをするのか」と書いたことも、突き放すように話したこともありました。尚二と信一の担当として、ストレスを与えすぎて発症を促すようなことにならないように悩みながらの関わりが続きしました。

時が経ち、お互いを知り合う試験期間が終わったのか、ずっと寝泊りをした指導員の大きな働きもあつて、彼の暴力的行動は嘘のようになくなり、その代わりに彼の周りで笑顔が増えてきたのです。

今でも時折彼の不機嫌な顔や黙って引き籠もってしまうような行動、暴力が顔を出すこともあります。そのたびに「信一君」と呼び掛けます。彼に「大丈夫だよ」ということを伝え続けたい。何でもない時を大切に過ごしたいと思っています。

「無事」という言葉の重さ、希少さを感じるこの頃です。この一年、どうか子どもたちが無事に過ごせますように。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

10月1日 ▶ 11月末日

10月

幼児9名 小学生8名 中学生6名 高校生8名

1日 原道小学校大運動会 力の限りを超えていこうとするような子どもたちの美しい汗に感動

7日 大利根藤幼稚園大運動会 いたずら坊主が大奮闘。

6日 山谷憲一 尚二入所 佐藤家岩崎保育士担当

10日 学習研究社の派遣事業 接遇研修実施

11日 後援会 赤十字奉仕団合同の構内整備ご奉仕 感謝

14日 埼玉大学角張正憲先生来訪して子どもと面接と職員へのスーパーヴァイズ

11日 入所予定の草野美深に情報提供のための入所前面接

19日 光の子どもの家後援会研修旅行

20日 TBSラジオ 政府提供番組「クローズアップ日本」の丁寧な取材

25日 愛知県八楽児童寮 三重県精華学院聖学院 徳島県徳島児童ホーム職員来訪して見学と交歓

27日 草野美深入所 倉澤家倉澤保育士担当

今月の物品ご寄贈者 栗橋町パチンコみます 鎌倉市吉本和子 堀切京子 加須市横村スミ子 梅沢三保 岡田敦北川辺町増田博 平川郁子 森山登美子の各位様

11月

3日 第61回理事会 事業報告 補正予算・役員人事承認
○ 十五周年記念第十六回感謝の集い 感謝礼拝の第一部 家後援会を拡大発展強力な支援体制を確立の金子嘉男前後援会長・前副会長針ヶ谷廣 共栄短期大学代表綿引里美の各氏に感謝状贈呈 島田徳三町長・青鹿忠重議長・守屋昭一熊谷児童相談所所長・高瀬美武施設長会長 戸田幸男中学校長各位のご挨拶ご参集140名余のお客様とお祝いの会を

○ 中島英子画伯の機関紙「光の子」表紙絵展が福島勲記念館集會室で9日まで開催 205名の来館者

9日 末広ヒロミ入所 原田家服部保育士担当

11日 恒例の後援会手打ち蕎麦会

12日 稲城教会で菅原施設長礼拝説教ご奉仕

20日 江森ヘヤーサロン散髪ご奉仕 感謝

24日 高3の河東将司就職内定

30日 東洋英和女学院商学部で菅原施設長が講演

今月の物品ご寄贈者 関東商事 井上高明 鈴木光子 白鳥道子 杉本英夫 山本玲子 市川保男 太田一平 大塚勇二郎 山野井明子 黒田俊雄 フェリス女学院 はむこ会 篠塚敏雄 久藤キチ あけぼの園 花見まき子 宮本清美 永野三恵 岩槻教会 須田あや子 梅沢三保 正木恵次郎 西原喜三郎 戸石幸男 みます 原田みどりの各位様 ありがとうございます (くら)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆謹賀新年☆年々ここで年越しをする子どもが増えます☆年越しぐらいは家族でと願ってお誘いしここで年越しをする子どもの家族も増えました☆不況のせいでしょうか☆それでも、楽しく嬉しいお正月になりそうです☆お正月は「家族の色彩」の色濃い季節です☆だから家族と暮らす時を保障したいと願ってきました☆それを可能にするのも皆様のお励ましのおかげです☆今号は、この数年全国児童養護施設やクザ施設長連合などとふざけながらも、全国で心を込めて子どもたちの生活を大切にしている施設長などが、二ヶ月に一度、試みている現場の状況を持ち寄り報告しあい、話し合う「養育を考える会」の仲間に加わった評論家芹沢俊介氏の玉稿を掲載して二一世紀を迎える紙面を飾ることができました☆多くの書を出している氏の論調は私たちのあり方を示唆しています☆今後も紙面に登場下さるようお願い☆さあ、今世紀こそ、最も弱い者を大切にする世紀でありますように！乞うご支援！ (哲)